

# 毛皮交易史の研究(2)

——毛皮の世界フロンティアと人種奴隷制度——

下 山 晃

はじめに

## 第Ⅰ章 中世「国際商業」の展開と毛皮交易

- 1 ヴァイキング
- 2 ロシア商人の起源
- 3 ハンザ同盟の抬頭
- 4 中世ヨーロッパにおける毛皮資源の枯渇（以上、51号）

## 第Ⅱ章 ユーラシア毛皮交易圏

- 1 ヨーロッパ＝イスラム商業圏
- 2 モンゴル帝国と毛皮取引
- 3 モスクワ商人とヨーロッパ市場（以上、本号）

## 第Ⅲ章 植民期アメリカの毛皮交易

- 1 白いインディアン
- 2 ハドソン湾会社の創設
- 3 セント・ローレンス商業帝国
- 4 ニューイングランド連合
- 5 製帽工業と重商主義
- 6 人種奴隷制プランテーションと毛皮

## 第Ⅳ章 毛皮の世界フロンティア

- 1 コサックの東漸
- 2 アリュージェンの受難
- 3 ノア・ウェスターズ
- 4 アスターズ・トラストと広東貿易
- 5 アメリカ西部の毛皮フロンティア

## 第Ⅴ章 極東の開国と毛皮

——世界フロンティアへの三つの通路

- 1 中露陸路貿易ルート
- 2 夷館取引の展開
- 3 日本の開国・文明開化と毛皮

おわりに

——掠奪のシステムの帰結

## 第Ⅱ章 ユーラシア毛皮交易圏

### 1 ヨーロッパ=イスラム商業圏

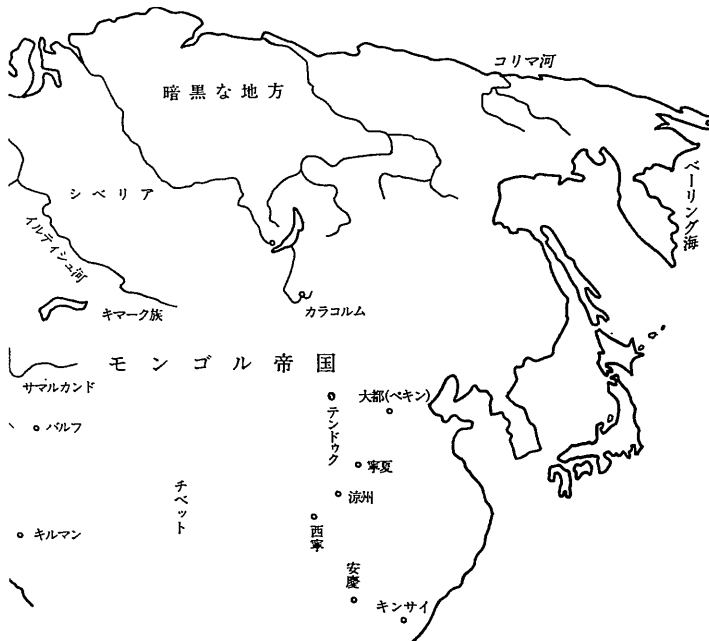
前章に見てきたヴァイキングとノヴゴロド、そしてハンザ商人の活動などから徐々に生まれたヨーロッパ毛皮市場の開発は、やがてモスクワ商人の抬頭へと連なり、その後は19世紀に至るまで、無尽蔵の毛皮資源を求めたシベリアの開拓史が展開する。そして毛皮を求めたモスクワ商人およびコサック（後述）の活動は、怒濤の勢いで広大なシベリアの原野を東漸し、鎖国期日本の国境の北辺に時おり接触しながらベーリング海峡を越え、北アメリカのフロンティア西端にまで連なる。しかもそれは、ロッキー山脈<sup>やまあい</sup>の山間において、北米大陸の毛皮資源を東から西へと追ひ求めた毛皮業者・狩猟者の動きとも邂逅する。ヨ

第Ⅱ章関連地図



ヨーロッパ市場を中核に、シベリアの原野を東へつき進む東向きのフロンティア開拓運動と、北米大陸を西へと<sup>ぼく</sup>進ずる西向きのフロンティア開拓運動とが、毛皮獣の乱獲と先住民社会の破壊を伴いながら、地球をひと回りして結ばれる。——「はじめに」においてすでに指摘しておいたように、毛皮のフロンティアは、「世界フロンティア」として、まさに<sup>グローバル</sup>全世界的な規模のつながりを持つに至る。

ユーラシア大陸の北半部と北米大陸を主な舞台として展開するこの「世界フロンティア」は、しかし、単に現在のアメリカ合衆国・カナダ領とロシア領にあたるキリスト教文化圏にのみ着目して理解される性質のものではない。一層正確な展望を得るためには、ここで一旦、さらに広い視角を措定して「南のルート」にも目を向けておかねばならない。黒海・カスピ海を隔ててロシアと対峙したイスラム圏での毛皮史の展開を知ることが必要なのである。



本文中に引用した諸文献の他、松田寿男・森鹿三編『アジア歴史地図』（平凡社 1966）。佐口透『ロシアとアジア草原』（吉川弘文館、1966）などにより作成。

そしてまた、シベリアを東へと進む開拓運動は、シベリアの南辺をすっぱりと覆<sup>おお</sup>う形で広がっていた広大なモンゴル帝国との係わりなしには十分には理解し得ず、どうしてもモンゴル帝国における毛皮取引の歴史にも目を向ける必要が出てくる。イスラムの毛皮史とモンゴルの毛皮史の解明というこの二つの課題に対しては、資料的制約が大きいため、本稿では満足のゆく検討を行えるはずもないが、邦語ではこれらの地域の毛皮史にふれた研究書が皆無という事情もあるため、せめて概略の紹介を試みておきたい。「世界フロンティア」という筆者独自の理論を補強するという意味からも、そうした試みは、一定度の意義を認められるだろう。

さて、まずは南方ルート、イスラム圏での毛皮取引の歴史であるが、いわゆる「琥珀<sup>こはく</sup>の道」などが先史時代から早くもバルト海よりイタリアにまで通じていたこと<sup>(1)</sup>に鑑みると、元もとロシアから中近東を南北に結ぶ「毛皮の道」の起源も、我われの通念を越えて相当に古いものであったと考えられる。イスラム世界が興隆する時期ともなると、中央アジアのアム河下流に栄えたホラズムからの貨幣が北ロシアより多数出土していること<sup>(2)</sup>や、サマルカンド近辺のソグディアナの文字で書かれたソグド碑文が発掘されていることから見ても、南方民

(1) H・シュライバー『道の文化史』（関楠生訳、岩波書店、1962）2—16。

(2) ただし、中世人の「死」に対する観念や、当時の「贈与経済」の本質をも鑑みるならば、大量の貨幣の出土は、必ずしも商業的交流が盛んであったことを意味する訳ではない。この点、「現在でもしばしば北欧で発掘される大量のササン朝、ビザンツなどの貨幣は、当時貨幣経済が北欧で展開していたためというよりは、彼らの富と死の関係の意識をより明瞭に示すものと言える。……11～12世紀以降を利潤を目的とする経済の段階と見るならば、それ以前は贈与経済の時代であった。……贈与は単に財産や動産や不動産などの経済的に意味のある物の交換であっただけでなく、饗宴、軍事奉仕、婦女子、祭礼なども交換され、贈与慣行は宗教、法、道徳、政治、経済の全制度を包含する全体的社会現象だった」という指摘（阿部謹也『中世の星の下で』ちくま文庫、1986、248—266）は、きわめて重要である。この指摘で示唆された史実をさらに詳しく追及してゆくならば、「商業の復活」論や経済発展段階説など、経済的事象にのみ研究の対象を局限してきた従来の商業史家の多くの学説や論争は、改めて根本からの吟味が必要になると思える。詳細については、機会あり次第、別途論及を行う。

族の活発な商業活動が北方ロシアにまで及んでいたことは、まず間違いない。ただ、アラブ人とハザール人（カザール人）の間で長い期間にわたってくり返し激しい戦争が続けられたりしたために、ヨーロッパ・ロシアと中近東との間に広範な毛皮交易網が確立する可能性は8世紀後半の内に閉ざされてしまっていた。一定度の発展があったとはいえ、イスラム市場は、毛皮に対して後にヨーロッパ市場が果たしたような役割を担うまでには、成熟しなかったのである。

中世初期イスラム圏の「毛皮の道」の実体については余り明らかではないが、いくつかの記録が知られている。マホメットが生まれた頃、6世紀の半ばにヨルダヌスなる人物が書きのこした記録によると、北方ポントのステップに居たオン・オグルスの民が、黒海北辺クリミア半島の先端にあるセヴァストポリで「ネズミ」や白テンの皮革・毛皮を取引していたという。現レーニン湖に注ぐカマ川やヴィアツカ川流域の盆地からは、ビザンチン帝国やササン朝ペルシャ時代の金属器や銀貨も多数出土しており、この時期にすでに中央ロシアから南へ向かう交易路は、時期によっては相当な広がりや地域的な連関を持って発達していたことが知られる。

今から1100年前には、バグダードに万能の学者として名高いアル・マスூディ [895年頃～956年] が現われ、30巻におよぶ大百科事典『時代情報』を独りで著わすという怪物的な事業を達成している。「アラブの歴史学の父」とのアダ名で知られるそのマスூディが、943年に当時の毛皮取引の事情について次のようなコメントを書きのこしている。「アラブやペルシャの王族は、キツネの一種から得られる黒い毛皮をことのほか好み、その生皮1枚に対し、破格の100ディナール以上の大金を支払っている」と。彼はまた、「ブルタース地方〔ヴォルガ・ブルガールとハザールの中間地域〕で獲れる黒ギツネや赤ギツネの毛皮は、類のない高級品として、アラブやペルシャの王たちによって非常に喜ばれた」と述べている。

マスூディが活躍した9世紀から10世紀にかけては、ムスリム商人（イスラム教徒の商人）がヴォルガ河流域でも取引活動に従事したことを示す史料も知られている。そこでは、彼らムスリム商人は、絹やガラス製品・銀貨・香辛

料・高級陶器などを持ち込んでロシア産の毛皮や蜜蠟・ハチミツ、それに奴隷などと交換した。取引拠点となったのは、ヴォルガ下流のデルタに位置したハザールの都イティリや、ヴォルガ、カマ両河の合流点を中心としたヴォルガ・ブルガールの町々（現レーニン湖の周辺に散在）であった。ハザールの汗（族長）やヴォルガ・ブルガールの支配層は、毛皮や奴隷をはじめとして自国の領内を通過する物品への重い課税を通じ、巨大な富を蓄積することになった。

イティリにもたらされる毛皮には、二種の供給源があった。第一は、北方で捕獲した獣の毛皮を持ち込む商人によるもの、第二は、ハザール人が徴収する貢納から得られる毛皮であった。なお、ヴォルガ・ブルガールからの貢納は、一世帯につき黒テン1枚、東方スラヴ諸族から徴収する毛皮は、一家族につき白リスの毛皮1枚と定められていた。こうした形で、ムスリム商人はロシア産の毛皮をイティリやハザールの支配に属する近隣の町々において定期的に大量に獲得した。そのため、アラブ世界では毛皮類のことを khazari と呼ぶようになった、と伝えられている<sup>(3)</sup>。

マスューディより少し前の時代の地理学者に、貴重な地理書をのこして当時の中近東およびアフリカ、ヨーロッパ各地の世情を記録したイブン・フルダーズベ〔?～912年頃〕がある。彼はアッバース朝の官吏として駅逦局長を勤めていたため、世界各地の最新の情報を得ることができる立場にあった。彼の地理書は、南フランス在住のユダヤ商人たちがフランス語やスペイン語だけでなくアラビア語やペルシャ語、スラヴ語にまで通じ、地中海から紅海、インド洋を越えて遠く中国にまで赴いていたという史実を記録したことで有名であるが、そのユダヤ商人の中国との交易を論じた箇所には、実は毛皮のことが出てくる。少し長くなるが、商業史上大いに注目すべき史実であるため、要点をすべて引用してみたい。

「ローマ、ブルガール、スラヴ、アヴァールの各国はスペインの北に位置

(3) T. S. Noonan, "Furs, Fur Trade," (*Dictionary of the Middle Ages*. Charles Scribner's Sons, 1985) 331. D. M. Dunlop, *Arab Civilization to A. D. 1500*. (Longman, 1971). ボヴィ・ミロラド『ハザール事典：夢の狩人たちの物語』（東京創元社, 1993）も見られたい。

する。バグダードには、マグレブの海を経てスラヴ人、ローマ人、フランク人、ロンバルディア人の奴隷が輸入され、ローマ人、スペイン人の娘たちも売られてくる。ビーヴァー皮やその他の毛皮類、薬品、珊瑚なども送られてくる。……ユダヤ商人たちはアラビア語、ペルシャ語、ラテン語、フランク語、スペイン語、そしてスラヴ語を話す。彼らは東から西、西から東へと陸路で、また海路で旅をつづける。彼らは西方からは宦官、女奴隷、少年奴隷、絹、ビーヴァーやテンをはじめとした数かずの毛皮類、それに刀剣類を運んでくる。フランク王国を出帆した彼らは、まず「シナイ半島の」アル・ファラマーに向け船出する。そこからはラクダの隊商を用いてスエズをめざし、東の海〔紅海〕で再び船に乗る。それから一行は al-Jar [アルジェリア?] やジッダ〔紅海中央部東岸、メッカの西方に位置する古来の商港〕に向い、さらにシンド、ヒンド〔インド〕を経て中国へと至るのである。

中国からは彼らは麝香やアロエ、樟脳、肉桂などの東洋物産を積み、往路とは逆にスエズ、アル・ファラ経由で西の海〔地中海〕へと向かう。ローマ人に商品を売るためにコンスタンチノーブルに向かう者もあれば、フランク王国へと帰る者も居る。時には地中海東端のアンティオキア<sup>あきな</sup>で商いを行う者もある。……同様な交易は、陸路を通じても行われている。ユダヤ商人たちはスペインやフランクを出発してモロッコに渡り、タンジールをはじめアフリカ各地やエジプトへと向かう。そしてパレスティナをめざし、ダマスкас、クーファ、バグダード、バスラに至るのである。さらには、カスピ海を越えて、ファールス〔ペルシャ〕、キルマン、シンド、ヒンドから中国へと達する。時にはビザンツ方面へと道をたどり、スラヴ経由<sup>(4)</sup>でハザールの首都へと至る者もある。……」

④(4) 引用文中、「マグレブの海」とあるのは、地中海南西域を指す。引用文の出典は、D. M. Dunlop, *The History of the Jewish Khazars*, (1954). なお、木崎良平「〈ルーシ〉に関するイブン・ホルダドベールの記事について」《『史林』44巻6号、1961）。梅田輝世「アップース期とカロリング朝フランク：アラブとフランクの交流について」(梅花短期大学『研究紀要』39、1990) 91—103。も参照が必要である。

フルダーズベやマスューディ以後、イスラム圏の歴史学者は、ちょうど後の時代の西洋の歴史学者と同じように、権力者や貴族が毛皮に対して信じられないような大金を支払っていたことについて、時おり大きな驚きを表明している。そうした驚きは、大旅行家として有名なイブン・バトゥータ〔1304年～1368/69年〕が「インドでは黒テンのmantが400ディナール以上、白テンのmantは1000ディナール以上もしている！」と特記する時代までつづくことになる<sup>(5)</sup>。ちなみに、バトゥータの旅行記は、後にヨーロッパ各国語に翻訳されて大ベストセラーとなり、大航海時代に絶大な影響を持つことになった書物である。

ところで、遅くとも9世紀の後半には多数のロシア商人が水運を活用してバグダードにまで達していた。彼らは、ビーヴァーや黒ギツネの毛皮をイティリに運び、カスピ海を渡って南岸のジュルジャン（現ゴルギャン）を経由、そこから峻険なザグロス山脈を越えて人口150万と言われた中世世界最大のこの大都会に集まったのである。もっとも、黒テンや灰リスを大量に市場<sup>ベザール</sup>に持ち込む商人は、大抵は「ロシア人」という呼び名で呼ばれており、カスピ海の北岸からザグロス山脈を越えてバグダードに至った北方系の商人の中には、実際にはロシア人以外も多かった。ロシアよりもっと遙か遠くのサカーリバ（東欧人・北欧人）も含まれていたらしい。ロシア人がサカーリバから強制的に毛皮を徴収し、それをバグダードにまで運んだ可能性も高い。

10世紀になると、ロシア商人はハザールやヴォルガ・ブルガールの市場で最も主要な商人として知られるに至った。921年の6月にバグダードを出発してホラズムからヴォルガ・ブルガールの王宮に到達したイブン・ファドラーンは、ロシア商人が黒テンの毛皮や少女奴隷を金貨・銀貨と盛んに交換していた史実を、有名な旅行目撃談『リザーラ』の中に書き留めている。イブン・ファドラーンはまた、ブルガールの商人たちが、白海地方に住んでいたヴェス人から黒テンや黒ギツネの毛皮を徴収したとも伝えている。イブン・ルスタヤガルディーもまた、ロシア商人が白テンや黒テン、イタチ、それに灰リスの毛皮をブルガールの市場で盛んに取引したと伝えている。すでに述べたように、ヴォ

(5) イブン・バトゥータ『三大陸周遊記』（前嶋信次訳、河出書房新社、1977）。



ルガ・ブルガールはヴォルガ河とカマ河の合流点、現在のレーニン湖一帯を根城としていた。そのため、水運利用を中心として運ばれた南方向けの毛皮は、いずれもヴォルガ・ブルガールの支配した取引拠点に集積されることが多かった。ロシア商人によってブルガール各地のマーケットに持ち込まれた毛皮は、多くはディルハム銀貨の2.5倍と算定され、代用貨幣ともなった。<sup>(6)</sup>

ハザールの都イティリの町は、国際商業都市バグダードの発展に伴い、毛皮取引を通じて国際市場の性格を帯びた。と言うより、8世紀には毛皮や商品通行税の蓄積などによって世界有数の商業都市となっていたイティリの町の繁栄をひとつの大きな柱としてこそ、バグダードの栄華も支えられていたのである。19世紀に鉄道が登場するまでは河川や湖が遠隔地交易の基盤となっていたが、カスピ海に臨みながらカザフ草原という広大な平原地帯の中央に位置し、しかもヴォルガ河口という水運の要衝にあったイティリの町は、東西のみならず遠く北のバルト海と南のカスピ海・黒海の経済圏を連結する一大商業拠点であった。ヴォルガ河を挟んでそのイティリの対岸<sup>あた</sup>りには現在アストラハンの町が栄えているが、服飾用語では、今日でも「アストラカン」という言葉は、アストラハン特産のカラクール種の子羊の毛皮を意味している。その「アストラカン」の起源は、イティリの栄えた時代にまで遡るのである。なお、ハザールの抬頭した時代には、ヴォルガ河はイティリ河とも呼ばれていた。イティリの交易圏は、王国や民族居住区域、そして宗教などにより必ずしも常に厳密に寸断されたものではなく、ヴォルガ河とカスピ海の水運の拡がりにより基本的に性格づけられた。その証拠に、国際貿易を安定させる方策として、イティリの支配層はユダヤ教を受容した。イスラム教の側からもキリスト教の側からも同等な距離を保つには、それが最善の手段だったからである。実はイスラム世界とキリスト教世界（ヨーロッパ）とをつなぐ社会経済的な枠組みは、こうしたところからも徐々に確立されていった訳であり、わが国では一般にはハザール

(6) M. Canard, "La relation du voyage d'Ibn Fadlân chez les Bulgares de la Volga," (*Annales de l'Institut d'études orientales de l'Université d'Alger*, 16, 1958). S. Rapoport, "Mohammedan Writers on Slavs and Russians," (*Slavonic Review*, 8, 1929-30). Noonan, op. cit., 331-332.

(イティリ) 商業の展開などはほとんど完全に見落とされてはいるもの<sup>(7)</sup>の、歴史上特筆すべき意義を担った史実が再認識されるべきと思われる。そうした再認識は、一国・一民族の枠を越えた商品圏や文化圏、それに歴史的な「環境」(F・ブローデル)<sup>(8)</sup>を想定することなしには、得られないように思える。

もっとも、イティリの繁栄は永くはつづかず、ロシア (特にキエフ)、スラヴ諸族の発展に圧倒される形で歴史の表舞台からは姿を消してしまう。ハザールでは、ヴォルガ・ブルガールなどとは異なって、自分たちで毛皮を鞣<sup>なめ</sup>して皮革製品をつくるということはなく、あくまでも半遊牧の経済体制を基本としており、その意味でも大規模な都市の永続的な発展は阻害された。932年頃、アル・イスタフリーは、「ハザールで売られる毛皮はすべて外国産のもので、ヴォルガ・ブルガールやロシア、そしてさらに北方の地域から来たものだ」と書きのこしている。皮革鞣業<sup>じゅうたん</sup>は、絨毯産業や窯業などと共に、イスラム圏では工業組織が比較的<sup>(9)</sup>に大きな発達を見せた分野ではあったが、技術的・経済的限界も常につきまとった。

なお、ヴォルガ・ブルガールからは、陸路を通じても中央アジアに向けて大量の毛皮取引があった。そのことについては例えば、10世紀の80年代、ホラズムに向けて黒テンやリス、白イタチ、白テン、テン、キツネ、ビーヴァー、野ウサギなどの毛皮が送られたことを書き留めたムカッダシーの記録がある。またホラズムへは、西シベリアのイルティシュ河周辺のキマーク族がテン、黒テン、白テン、キツネ類を送り、塩と交換していたことが知られている。西シベ

(7) 本格的な関連文献としては、梅田良忠『ヴォルガ・ブルガール史の研究』(弘文堂、1959)を挙げ得るのみである。

(8) F・ブローデル『地中海』(浜名優美訳、藤原書店、1991) I。

(9) 特に、スペインにイスラム文化の華を咲かせた後ウマイヤ朝時代〔756年～1031年〕には、コルドバで皮革産業が大いに盛んとなり、「良質の皮革」を意味するCordovanなる言葉も生まれた。後代に至りモロッコやフランス、イギリスなどでも皮革産業が勃興するのは、コルドバの先例があったためである。T.W. Arnold, *The Legacy of Islam*. (London, 1960) 15. P.K. ヒッティ『アラブの歴史』(岩永博訳、講談社学術文庫、1982) 上巻。斎藤栄三郎『イスラム経済史の研究』(藤南堂、1965) 96—97。

リアからはホラズムを通じて、現在のイラク領やさらに南の地域にまで毛皮が送られるようになっていた。

ところで、すでに9世紀の内にバグダードで活動していたハザール、ロシア、ブルガールの商人たちは、10～11世紀にはビザンチウム（現イスタンブール）に盛んに入出入りするようになり、黒海交易を通じて大量の毛皮をビザンチン領内にもたらした。11世紀にはビザンチン帝国が復興期を迎えたこともあって、ヴォルガを下ってハザールやイスラム世界を経由した毛皮は、東地中海世界一円に流れ込んだ。この世紀、ビザンチン皇帝コンスタンチン・モノマークがロシア皇帝に贈った王冠は、黒テンの毛皮で縁取られた宝石づくしのものである。この王冠は、エイゼンシュテインの未完の大作『イヴァン雷帝』でも雷帝戴冠のシーンで登場したものであるため、熱心な映画ファンには、すでに馴染みのものであろう。ギリシャ正教総本山に当たるウスペンスキー聖堂（モスクワ、クレムリン宮殿内中央）の博物館には、今もこの王冠が所蔵され、ツァー（ロシア皇帝）の権威のシンボルとして展示されている<sup>(4)</sup>。

12世紀に至ると、記録はさらに詳細になる。1120年頃に書かれたセルジューク朝〔1038年～1194年〕の科学者マルワージーの書物の中では、灰リスや黒テンなどブルガールの森で獲れる毛皮獣について特別な関心が払われている。マルワージーによれば、ヴォルガ・ブルガールの支配層は北ロシアの土着民から強制的に大量の毛皮を徴収したという。別な史料では、ヴォルガ・ブルガールの毛皮商人は、20日間の旅程で北に向かい、毛皮の捕獲に当たったことが記されている。彼らは、犬ぞりの装備が十分な場合は、さらに日数をかけて北進し、白海地方やユーラ（イウグラ）方面にまで足を伸ばした。また、ブルガール商人がユーラで織物や塩と高価な黒テンの毛皮を交換した史実を伝えた史料ものこされているし、白海のビーヴァー皮と引き換えにブルガール商人が刀剣類を商ったことを伝えた史料もある。白海の土着民たちは、ユーラ地方や極寒の北極海にまで出向き、入手した刀剣をさらに高価な黒テンと交換した。この世紀、

(4) R. Delort, *L'Histoire de la Fourrure de l'antiquité à nos jours*. (EDITA S. A., 1986) 137-144.

ブルタース地方では、テンとイタチが富の源泉であった。柔らかで良質・高価な毛皮を得るためには、商人や営利心旺盛な豪族層は“魔物が住む”とさえ信じられたどんな遠隔の土地へさえも出向く時代が訪れようとしていた。<sup>(1)</sup>

なお、12～14世紀は、商業活動に重きをなしたユダヤ人に対する迫害が、スペインやポルトガル、ドイツ、イギリス、フランスなどヨーロッパ各地で嵐のように巻き起こった時代であった。ペストの流行があればその元凶と言われ、十字軍の聖戦があればイスラム教徒と同様に異教徒と言われて、事ある毎に虐殺・隔離・追放の対象とされたのである。ヨーロッパ＝キリスト教圏で迫害されたユダヤ人の一部は、イスラム諸国の君主に庇護を求め、ビザンチウムや黒海西岸の回教都市を経て、イティリやキエフ方面へと流浪した。ハザールやモスクワの商人が毛皮の国際的な取引に関心を抱きはじめたひとつの機縁は、このユダヤ商人の逃<sup>せん</sup>風・流入にあった。

- (1) ヨーロッパ＝イスラム商業圏における毛皮取引に関する記述は、わが国では例えば東京都三鷹市の中近東文化センター図書室所蔵の諸文献・定期刊行物に散見されるが、本項の論述に関連した最も包括的な近年の業績として、次の2論文を挙げておきたい。E. Bennigsen, “Contribution à l'étude du commerce des fourrures russes; La route de la Volga avant l'invasion mongole et le royaume des Bulgars,” (*Cahiers du monde russe et soviétique*, 19, 1978). J. Martin, “Trade on the Volga; The Commercial Relations of Bulgar with Central Asia and Iran in the 11th-12th Centuries,” (*International Journal of Turkish Studies*, 1, 1980). また、本文中に名を挙げたマスウディーやイブン・ファドラーン、イブン・フルダーズベ、イブン・ルスタ、イスタフリー、ムカッダシーの活動については、家島彦一『イスラム世界の成立と国際商業』（岩波書店、1991）も参照されたい。

## 2 モンゴル帝国と毛皮取引

今日でも、中東諸国や内陸アジアを訪れてみると、「あの野蛮なモンゴルが押し寄せて私たちの国を滅茶苦茶に破壊した」といった説明を現地の観光ガイドから受けることが多く、筆者自身、トルコやイランやアフガニスタンでそうした説明を受けた経験がある。また、フランスの田舎などでは悪戯<sup>いたづら</sup>をはたらく子供に対して「タルタル人（モンゴル）が来るぞ！」と脅かすのが今日でも習

わしといわれており、直接にはモンゴルの侵攻を受けたことのないフランスにおいてさえ、「地獄の民」モンゴルの襲来に対する恐怖が如何に大きかったかを今に伝えている。確かに、モンゴルの勢力は、まるであらゆる都市的な文化を憎悪するかのように町という町を徹底的に焼き払い、何百年ものあいだ人びとの生活の支柱であった人工地下水路（カナート、カレズ）を埋めつくし、女と工人だけを連れ去って住民を皆殺しにするという、今日の温厚なモンゴルの民からは想像もつかないような、信じがたい暴虐を尽くしたと伝えられている。現在イランやアフガニスタンで「観光名所」となっている城址には、チンギス・ハンやその配下の者が破壊した廃墟が頗る多い。

しかし、本章の標題に示した「ユーラシア毛皮取引圏」という視野の中でモンゴル帝国の毛皮取引を論じるには、「ヨーロッパや中近東諸国とモンゴルとは徹頭徹尾敵対し、特にヨーロッパ・中近東の側の経済活動は怒濤の如きモンゴルの侵攻によって完全に中断・途絶した」というような、一般的な先入観をまず取り払っておく必要がある。都市の破壊や軍隊の撃滅が必ずしも商業活動や文化の断絶に直結する訳ではなく、実際には、中東イスラム圏やロシア南部では、毛皮の取引は、むしろモンゴル侵入の時期にこそひとつのピークを迎えていた。西方への「蒙古襲来」が、史上空前と言えるほどの徹底した都市の破壊や住民の大量虐殺をもたらしたことは確かに事実であるが、モンゴル支配層の毛皮愛好は、ロシアやイスラム世界の毛皮取引を決して中断させるようなことはなく、むしろ「ユーラシア取引圏の確立」と名づけ得るような<sup>(1)</sup> 拡がりを毛皮取引の世界にもたらしたのである。

モンゴル侵入前夜、9世紀～10世紀のヨーロッパ・ロシアでは前項で見たようにヴォルガ・ブルガールが南方イスラム圏やビザンチン帝国との間に、かなり大々的に毛皮の取引を行っていた。彼らブルガールの毛皮商人は近隣の森

(1) その背景を理解するために、佐口透編『モンゴル帝国と西洋』（平凡社、「東西文明の交流」4、1970）第2章、海老沢哲雄「西欧とモンゴル帝国」（柴田三千雄ほか編『移動と交流』、岩波書店〈シリーズ世界史への問い〉3、1990）317—342、家島彦一（上掲書）などを参照されたい。

林地帯から毛皮を得たばかりでなく、遠く「暗黒界」と通称された北極海周辺のウィスー族やユーラ族などからも最高級の黒テン、ビーヴァーを大量に獲得した。「アルー」と呼ばれた地方からは上質のリス皮を仕入れることが出来た。特上の黒テンの毛皮が、「スラヴ人の居住する」河川地域、つまりは四方八方の河沿いからもたらされていた。このヴォルガ流域の南方向け毛皮交易は、11世紀の半ばから西方向けルートが勃興する1240年頃まで極盛期を迎え、以後それは何よりもまずモンゴル支配層の需要に刺激を受ける形で、盛衰をくり返し<sup>(2)</sup>た。その事情の一端は、マルコ・ポーロやプラノ・カルピニ、イブン・バトゥータをはじめとして、当時の有名無名の数多くの旅行家、修道士により記録された。

まず、アブ・ハミッド・アル＝ガーナティなる旅行家がヴォルガ流域一帯の毛皮取引の隆昌につき詳細な記録をのこした。その旅行記は、1130年からおよそ20年間にわたる彼自身の大旅行に基づくものであった。アル＝ガーナティの生きた時代から1世紀の間に、いわばモンゴルの侵攻に押される形で、ヴォルガの毛皮交易の中心は一時西のクリミア半島へと移る。毛皮経済圏の、カスピ海から黒海への移動である。その当時の事情については、1230年頃までのイスラム世界の通史『完全なる歴史』を著したことで知られるイブン・アル＝アシール〔1160年～1234年〕が記録している。ちなみに、アル＝アシールは、名君として名高いサラフ・アッディーン〔サラディン〕に同行して十字軍との戦いにも参加したことがある人物である。彼によれば、クリミア半島内のスダク（スロズー、ソルダイアなどとも呼ばれた）が13世紀初頭までに毛皮取引のメッカとなり、大いに栄えたという。スダクはポロヴツィ族（ないしはクマン族）の居住地で、奴隸やブルータスからの毛皮、ビーヴァー皮、リス皮を売ることで、諸国からさまざまな商品が流れ込んでいた。

しかし、1235年、モンゴル支配層がカラコルムで開いた<sup>クリルタイ</sup>大集会在「ヴォルガ

(2) J. Martin, “The Land of Darkness and the Golden Holde; The Fur Trade under the Mongols, XII–XIVth Centuries,” (*Cahiers du monde russe et soviétique*, 19, 1978).

とその西方を征服する」と決定した時から、イスラム諸国も、スラヴ諸国も、まったく予期し得ない運命をたどることになった。イスラム世界とスラヴ世界が、モンゴル世界に包含される形で、「ユーラシア世界」を形成した。そして、1250年代の初頭、チンギス・ハンの孫バトゥが騎兵戦法や投石器、城塞破壊器、火薬を駆使して各地を征服、ヴォルガ下流河畔のサライを都としてキプチャク・ハン国〔1243年～1502年〕を建国すると、ロシア諸侯国から大量に毛皮の貢納が行われるようになった。モスクワもキエフも灰塵に帰し、東欧世界は未知の侵入者に席捲されんとした。

キリスト教世界の支配層は、この事態に対し、イスラムの脅威に対する以上の、まさに驚天動地の異様な恐怖心を抱いたはずである。すでに6次にわたる十字軍を組織していながら、第1次十字軍以外はさしたる決定的な戦果もなく一進一退をくり返していた折に、瞬時にして宿敵イスラムをことごとく破壊し尽くし、さらにヨーロッパ世界に怒濤の勢いで迫ろうとする正体不明の蛮族が襲来したからである。すでに1238年、パリ在住の修道僧マチウは「北欧の人びとはニシンを漁りにあえて出かけようとはしなくなった。恐ろしい悪魔が攻めてくるからだ」「血を飲み肉を食う妖怪、悪魔の影がやってくる」とモンゴルの恐怖を書きつけた。直接蹂躪されたことのないフランスにまで、モンゴルの勢威は及んだのである。——しかし、度を過ぎた不安や恐怖心は、希望にすり変わることがある。

宿敵イスラムを壊滅的な混乱状態に陥れたモンゴルは、実は、自分たちの同盟者ではないのか、という発想がキリスト教諸国の間に生まれた。1245年、リヨンで公会議が開かれ、教皇イノケンティウス4世はモンゴルに特使を送ってキリスト教への改宗の勧告、同盟の打診、モンゴルの内情視察を行うことを決議した。この時任命された特使の中にフランチェスコ派修道士のプラノ・カルピニ〔1182年頃～1252年〕が居た。カルピニの著した『モンゴル記』は、冷静な観察と情報収集を基本としており、従来の空想的な「アジア人＝化け物」観を改める役割も果たしたと言われる<sup>(9)</sup>。その著の中で、カルピニはドニエプル、ドン、ヴォルガなどの大河流域に先住したロシア人がモンゴルの戸籍簿<sup>センサス</sup>にこと

ごとく登録され、それぞれ白クマ、ビーヴァー、黒テン、キツネなどに加えて、ラテン名不明の種々さまざまな毛皮を貢納させられて悲惨な境遇にあえいでいる有様を報告した。ただし、貢納制度の苛酷さに気づいたカルピニも、商人による南方向けの大量の毛皮輸出の実体については見落とした。

カルピニにつづいて、1247年～50年にはドミニクス教団のアンセルムが派遣され、1249年～50年にはアンドレアス、1253年～55年にはウィリアム・ド・ルブルク〔1220年頃～1293年〕がいずれもフランス王ルイ9世によって特使に任命されてモンゴル偵察の密命を受けた。キリスト教徒（との同盟者）の獲得という本来の使命に関してはルブルクらの成果は芳しくなかったものの、東方の地理・風俗については当時としてはきわめて詳細な貴重な情報がもたらされた。ロジャー・ベイコンがわざわざルブルクと会見して東方の情勢についての情報を熱心に仕入れ、それがベイコンによる哲学革新の一機縁になったというのは、一部研究者の間では有名なエピソードである。それはともあれ、ルブルクは先に少しふれたクリミア半島スダクの毛皮交易の有様について具体的な描写を行っている。彼によれば、「リス、白テンをはじめとして諸々の高価な毛皮が、ロシア商人や北欧商人の手によってスダク経由でアジアのミノア方面にまで運ばれていた」という。スダクばかりでなく、「ロシアやヴォルガ・ブルガール、モクセル人の国、それに近隣の国々にではどこでも毛皮の取引がきわめて盛ん」で、「西方モンゴルの支配者の領地へ上質の毛皮が大量に送られていた」史実も、ルブルクによって伝えられている。「モクセル人」というのはヴォルガ上流の盆地に居住したモルダヴィア人のことであるから、ヴォルガの水系は上流から下流に至るまで、すでに全域モンゴルの支配下に置かれていた事情が推察される。

特命使節とは別に、プライベートな動機から東方諸国を探訪し、当時の毛皮取引の事情について最も豊富な情報を書き記した旅行家の代表格がマルコ・ポ

- (3) 増田義郎『新世界のユートピア』（研究社、1971）15—27。カルピニの旅行については、後出のルブルクの旅行と共に邦訳で概要を知ることができる。カルピニ、ルブルク『中央アジア、蒙古旅行記』（護雅夫訳、桃源社、1965）。また、山中謙二『地理発見時代史』（吉川弘文館、1969）第1章なども見られたい。



ーロ〔1254年～1324年〕である。『東方見聞録』には「狩猟」に係わる記述が頗る多い。従って、以下しばらくの間、ポーロの『東方見聞録』に現われる狩猟・毛皮関係の記述をとり上げ、網羅しておく必要がある。西洋が最初に本格的に東洋世界に目を向けはじめた時代に書かれ、しかも後世への影響が絶大であったこの書物の中に狩猟と毛皮の記述が含まれており、その上それが相当な比重を示していることは、きわめて印象的である<sup>(4)</sup>。

まず早くも、アルメニアについて述べた第1章冒頭の記述が、「物資は豊かで、狩猟に適する鳥獣が多い」との書き出しではじまる。「狩猟に適した鳥獣が多い」「狩猟が楽しめる」「狩猟が盛んである」といった類の記述は、この旅行記の随所に散見される。イスラム文化やモンゴル文化が、きわめて優美な数かずの「狩猟図」を遺した史実が改めて想起こされるが、そうした美術史上の遺産は、実際にイスラム、モンゴル社会において狩猟が盛んであったという、当時の社会経済的な生活状況を反映してもいるのである。

ポーロの描写によれば、皮革類は「衣類や靴」をはじめ「茹でて甲冑を造る」のに用いられ(1-11:バルフ、3-11:カラジャン)、ラクダの毛からは「呉絨」と通称された毛布が得られた(1-27:涼州・寧夏、1-27:テンドック)ことがわかる。モンゴルの支配層は時折「狩猟のための大旅行」(2-12:大ハーンの一年の行事)をしたが、その最大の目的は恐らく、毛皮・皮革と共に麝香<sup>じやこう</sup>を得

(4) 以下、引用文の後ろの対番号:地名(事項名)は、マルコ・ポーロ『東方見聞録』の翻訳本(青木富太郎訳、社会思想社〈教養文庫〉、1977)に示された章一項目番号:地名(事項名)を表す。例えば「この地方には大森林が多く、ライオン、クマ、ヤマネコ、シカなど、さまざまな野獣がおり、住民はこれを捕えて大いにもうけている」(3-7:クンカン地方)とある場合、その引用文は上記訳書の第3章第7項「クンカン地方」の項目に含まれることを意味する。

(5) 例えば、同上訳書の次の各項目を参照されたい。1-6:キルマン王国、1-11:バルフ、1-12:パダフジャン、1-22:タタール人の風習、1-24:タタール人の戦闘ぶり、3-6:京兆府、3-9:チベット地方、3-12:ザルダندگان地方(首都は永昌)、3-13:ビルマ、3-15:カウジグ(ラオス)、4-8:安慶と襄陽府、4-11:鎮江府と常州、4-14:タンビジュ(紹興府または宝陽)、4-16:ザイトン(泉州)、5-6:小ジャヴァ島、5-12:コイルム王国とコマリ地方。

るためであった。当時「麝香獸は、住民に特に大きな利益をもたらす」(3-10：功都)もので、どの国でも香料・精力剤・鎮痛剤としてきわめて需要が高かった。『東方見聞録』では、麝香そのものへの言及も多い(1-27：涼州・寧夏、2-5：大ハーンの宮殿など)。モンゴル帝国では、特定の区画にヒョウやヤマネコ、カモシカ、シカ、ウサギ、野ウサギ、ワシなどが飼育されていた(2-11：大ハーンの狩猟、4-13：全マンジの首都キンサイ)が、野ウサギなどは作物を荒らした時に大々的に狩猟部隊を編成して狩り尽くした(3-3：大原府)のである。

マルコ・ポーロの東方旅行の最大のハイライトと言えるのは、世祖フビライ(大ハーン)の宮廷での生活であるが、その宮廷での見聞を記した第2章第11項「大ハーンの狩猟」は、次のような書き方で当時の狩猟の有様や毛皮の価値を紹介している。<sup>(6)</sup>

「12月、1月、2月の三ヵ月間は、首都から40日行程以内の地域では狩猟が行われる定めで、大きな獲物、イノシシ、カモシカ、シカ、ライオン、クマなどは大部分宮廷まで送られる。獲物は内臓を取り出し、20日ないし30日行程以内の地域の住民はすべてこの規程に従うが、送られる量はおびただしいものだ。もっと遠い地域の人びとは毛皮をなめして送るだけだが、これは軍隊の武装用品を作るのに用いられる。

大ハーンはイノシシ、クマ、ラバ、シカなど、大きな野獸をとらえるように訓練されたヒョウやヤマネコを飼っている。エジプトのより大きいライオンも飼っているが、全身に黒、赤、白の縞模様のある美しい毛皮の動物である。

バヤン、ミンガンという二人兄弟の貴族が居り、〔狩猟用の〕犬の管理者である。いずれも1万人の部下を持ち、他に一人で1匹またはそれ以上の犬を世話する者がそれぞれ2000人であるから、合わせれば大した人数になる。大ハーンの狩猟では、一人の貴族は部下1万と犬5000匹を連れて左方を進み、他の一人は同様に右方を進む。彼らは並行して進むから、幅は

(6) 『東方見聞録』(青木訳、上掲訳書) 88—91。

1 日行程以上となり、どんな動物も逃れられない。これら二人の貴族は、10月から3月までの間に、獲物1000頭を供給することになっている。

大ハーンは12月、1月、2月を大都で過ごし、3月1日に出発して南方3日行程の大海の方へ鷹狩りの旅行に出る。大ハーンは4頭の象を並べ、その上に木造の部屋を造り、この部屋に入って旅行する。部屋は、金箔で内張りをほどこし、外側にはライオンの毛皮をはった立派なものである。

こうした旅行を続けて、カチャル・モドゥンという場所に着く。そこには、王子、貴族、それに貴婦人のテントが張られ、その数は1万以上、いずれも美しく、立派だ。大ハーンの宮廷にあてられるテントは大きく、1000人を収容できる。二つの広間と寝室の造りは次のようになっている。広間には3本の柱があるが、いずれも香木で、黒、赤、白の縞のライオンの毛皮で覆われている。部屋の内側にはテンと黒テンの毛皮がはってある。黒テンは北極ネコぐらいの大きさで、その毛皮は一人分の衣裳でビザンチン金貨2000ベザント、少なくとも1000ベザントは下らない値打ちを持っている。だからタタール人は、黒テンを“毛皮の王”と呼んでいる。

ライオンと黒テンの毛皮だけを見ても、これらのテントが、いかに金のかかったものであるかがわろう。どこの王でも、とても買えないものだ。」(2-5:大ハーンの狩猟)

当時のモンゴル社会における狩猟の意義や、モンゴル皇帝の豪華な生活ぶりの一端を髣髴<sup>ほうふつ</sup>させる記述である。こうしたモンゴルの風習は、実はマルコ・ポーロがフビライ〔治世:1271年~94年〕の宮廷を訪れる以前、チンギス・ハンの時代〔1206年~27年〕あるいはグユク・ハンの時代〔1206年~27年〕からすでに見られたものであった。モンゴル史学の泰斗ドーソンの記述を引いておこ

う。「チンギス・ハンはその法令において諸皇子に対し狩猟の練習を強く勧め、これを戦士の学校と呼び、モンゴル族は人間に対し戦争をしない時は動物に対して戦うべきであると要望した。

冬のはじめは大狩猟の時期であって、これは軍事的遠征に類似していた。

まず人を派遣して野獣が豊富にいるかどうかを観察させ、この報告を得たのち、半径1 ヶ月行程の内に幕営している諸部族に命令を下して10人について一定の人数を差し出させ、円陣を作り、指定した地点に向かって野獣を駆り立てさせた。これらの軍隊は右翼・左翼・中軍に分かれたれ、それぞれ諸將軍を頭（かしら）に戴いたが、その妻妾もこれに随行した。この軍隊の行進中、各方面から派遣された將校たちはしばしば君主のもとに来て、野獣の動静とこれを駆り立てる場所について報告した。狩獵兵の円陣ははじめは広大であるが、次第にせばめられて、ついに兵士たちは肩と肩を触れ合うほどになって、獵場として定められた地点に密集するが、この地点は、2、3 リューの周囲を有し、綱に垂れた毛氈で囲われていた。狩獵兵は野獣を脱走させないよう、十分に警戒してその円陣を守らねばならなかった。いささかたりとも怠慢なことがあれば、杖刑に罰せられた。

皇帝はその后妃と供奉をつれて第一番にこの囲みの中に入り、この狭い地点に満ち溢れるおびただしい各種の動物を射て楽しんだ。狩獵に疲れると、皇帝は獵場の中央にある高所に退き、皇族、將軍たちが狩獵を楽しむのを觀覽したが、そのあとで普通の將校が同じ楽しみに興ずることが出来、最後に兵士たちがこれを楽しんだ。この狩獵は数日間継続した。野獣の数がきわめて僅少になると、老人たちが皇帝の前に進み出て懇願し、補殺を免れたものを助命するよう乞うた。それでこれらの動物を放ち、次の狩獵の際の楽しみを増すように計った。次いで皇帝に陪食した將軍たちは、獵獸の分配を行なった。お祭騒ぎは一週間もつづき、それが終わって軍隊は元の幕營地に帰った。<sup>(7)</sup>

モンゴル軍の進撃の爆発的な破竹の拡張の秘密が、まさに狩獵習慣の戦争への応用に基づいていたことを示唆する一文である。騎馬と弓矢を存分に活用した戦法や、有名な千戸制（千戸・百戸・十戸を基礎單位に、集团的に村落や軍隊を組織する）という頗る「合理的」な軍事・行政上の組織制度などは、具体

(7) ドーソン『モンゴル帝国史』（佐口透訳、平凡社〈東洋文庫〉、1968）第2巻、42—43。

的にはいずれも上の引用文に見られるような日常習慣として展開していたのである。そうした戦法や制度は、何よりも狩猟と不即不離のものとしてモンゴル社会の中で整備されたのであり、「一民族による史上空前絶後の急速な覇権拡大は、毛皮獣の捕獲をひとつの目的とした狩猟と係わってこそ実現した」と指摘するのは、果たして筆者自身の我田引水的な勝手な思い込みに過ぎないであろうか。ともあれ、モンゴルのみでなく、テンとラッコの毛皮の獲得をめざしたシベリアの征服やビーヴァー皮を求めたカナダの開拓、「ブリゲイド」と通称された組織的狩猟団によるアメリカ西部の開拓などが、いずれも怒濤の勢いで毛皮獣の獲得をめざした活動に基礎を持っていた史実を、後に本稿では順次紹介することになる。そうした「流れ」の中では、19世紀のフロンティアは、13世紀のモンゴル社会の毛皮フロンティアと、微妙な形で、しかし確かな形でつながりを持つと感じられることになるだろう。なお、19世紀アメリカ西部でブリゲイド、トラッパー狩猟団や狩猟者たちの携帯食となったのは、ペミカンという干肉類であったが、モンゴルでも、牛一頭分の干肉を詰めた「ボルツ」が携帯食として大きな役割を果たした。これは牛の膀胱を袋にしたもので、一袋で10人の兵士3週間分の食糧となった。モンゴル軍10万の進軍には20万人の家族・職人と牛100万頭、羊300万頭が伴ったといわれるが、「ボルツ」こそが長期・広範囲にわたる巨大軍団の遠征を支えたのである。

少し時代を下ってグェク・ハンの時代にも、狩猟・毛皮は重要な社会的位置づけをされており、狩猟はいわば戦争の「予行演習」であった。上に見たような組織的な大がかりな狩猟によって狩り集められた毛皮は、モンゴル皇帝の富と権力の象徴として、数かずの儀式や祭礼の中で大きな役割を果たしていた。プラノ・カルピニが即位後8日目のグェクに拝謁した時（1246年8月）の模様を、ドーソンは次のように描写している。<sup>(8)</sup>

「宣教師たちはグェクの即位ののち数日の、八月の末に、多数の王侯や使節と同時に拝謁を許され、首席書記チンカイが謁見者の名を高らかに読み上げた。謁見者たちはいずれも皇帝に莫大な献上品を捧げたが、この献上

(8) ドーソン、上掲訳書、238—239。

品は主に豪華な織物、絹布と金とで織った帯、貴重な毛皮などから成り、また、鉄と革の鎧をつけた馬や驢馬もあった。

数日ののち、宣教師たちは皇太后のもとへ案内されて拝謁したが、皇太后は各人に表に毛のある狐の皮ごろもと絹服を一かさねずつ与えた。」

さて、『東方見聞録』は、巻末部において「極北地方」と「暗黒な地方」、そして「ロシアとキプチャク・ハン国」についてふれている。この寒冷な地域についての描写は、当然いずれも毛皮についての言及を含んでいる。チンギス・ハン自身が遠くヴォルガ・ブルガールや黒海近辺にまで遠征し、その後継者たちがモスクワやキエフ、ノヴゴロドにまで攻め入っていたのであるから、毛皮に対して少なからざる関心を持っていたマルコ・ポーロがこれら極北の地に対しても記述を割いたのは当然であった。再び『東方見聞録』の記述をたどって<sup>(9)</sup>おこう。

「極北地方〔シベリア?〕には、コンチという王がいる。この地方には身体が全部真白なクマがいる。長さは2メートル以上はある。また黒色の大ギツネ、野生ロバ、多くは黒テンなどもいる。彼らはこれらの毛皮で1000ペザントもする高価な衣服をつくる。リス、ファラオネズミも多く、夏には住民はこの狩猟で生計を立てている。人跡まれなので、野獣が多いのだ。

住民はすばらしい猟師で、多くの小動物を捕え、大きな利益を得ている。たとえば黒テン、テン、リス、黒ギツネなどで、これらの毛皮はきわめて高価である。彼らは一度かかったら決して逃れられぬ罠を使う。」(6-7：極北地方の王コンチ)

「前述の国々からはるか北方に、暗黒界と呼ばれる地方がある。住民は高価な毛皮をたくさん持っている。例えば黒テン、テン、リス、黒ギツネなどである。みんな狩猟を職業としている。太陽の照らしている国境地帯の住民はこの毛皮を全部買い取り、他へ売って莫大な利益を上げている。」

(6-8：暗黒な地方)

(9) 『東方見聞録』、前掲訳書、224—227。なお本項では、内容の変わらない範囲において引用は翻訳文を適宜省略し、また読みやすく改めた。

「ロシアは北方にあるきわめて広い地方で、住民はキリスト教徒であるが、ギリシャ正教を奉じている。どこにも臣属していないが、キプチャク・ハンのトクタイにほんの少しの貢物をおさめている。黒テン、テン、リス、キツネ（この毛皮は世界で最も美しく、大きい）など、美しい高価な毛皮をたくさん持っているし、獺も大量にあるが、商業は盛んではない。」（6-9：ロシアとキプチャク・ハーン）

ロシアやシベリアの北辺地域から送られる毛皮は、マルコ・ポーロの時代にも相当な数量に達していたと言われる。実際、シベリアやモンゴリア北方の諸地域には、巨漢を誇る白クマや大柄な黒ギツネ、それに「ファラオのネズミたち」と呼ばれたイタチ科の毛皮獣が今では信じられないほどに多数棲息していた。「暗黒界」で獲れた毛皮はモンゴル人が居住する地域のものよりもずっと良質で高価であった。ポーロが書き記した通り、モンゴル帝国では、商人の盛んな活動に加え、<sup>(10)</sup> 厳しい貢納によって大量の毛皮が取引された。

マルコ・ポーロについて、13世紀のアウフィーや14世紀初頭のアブル・フィダ、イブン・バトゥータ〔1304年～1368年/69年〕、それに「マムルーク朝時代の三大百科事典派」の一人として有名なアル・ウマリー〔1301年～1349年〕など、イスラム系の旅行家・歴史家たちもモンゴルの毛皮史についての記録をのこしたが、彼らはブルガール人と極北の諸民族との間の毛皮取引における「沈黙交易」の存在について<sup>(11)</sup> も言及している。その「沈黙交易」が彼らと同時代のものであったが、それともそれよりもはるか以前の時代のものであったか

(10) ドーソン前掲書は、貢納を取り立てる徴税吏が税金未納の農民の妻子を残酷な拷問に処したりしたことを何度か紹介している。

(11) 沈黙交易については、ヘロドトス『歴史』（松平千秋訳、岩波文庫）巻4—196、栗本慎一郎『経済人類学』（東洋経済新報社、1979）79—119、南方熊楠「無言交易」（『人類学雑誌』32巻10号）、K・ポランニー『人間の経済』（玉野井芳郎・中野忠訳、岩波現代選書、1980）Ⅱ：491—497、E・E・ホイット『交換のアンスロポロジー：その原始心性と経済の統合』（中村勝訳、晃洋書房、1992）173頁以下など。「暗黒界」での沈黙交易について記録したのは、ハースコヴィッツによれば、イブン・バトゥータである。M. J. Herskovits, *Economic Anthropology; The Economic Life of Primitive Peoples*. (The Norton Library, 1965) 185—187.

は断定し難いが、イスラム商人は概ねノヴゴロド商人やモスクワ商人とは敵対的であったため、自分たち自身ではユーラシア北端地域での活動はあまり活発に行なってはいなかったと言われている。恐らく過去の奇異な風習の伝聞が書き留められたに過ぎないのであろう（無論、言葉の通じぬ者同士が沈黙交易を取り行なった可能性もあるとは言える）。アル・ウマリーが「ある情報通の商人の言説」として述べるところによると、イスラム商人はせいぜいブルガールの領地内に行ったことがあるだけで、ブルガール商人がクルマン河〔カマ河〕北方で活動し、そしてクルマンの商人たちがさらに北方の極北の民と毛皮を取引した、というのが実際であったらしい。概ねのところ、イスラム商人の主な活動の舞台は、もっと東の地域に集中していた。

ヴォルガ・ブルガールはモンゴル侵攻後もロシア産の毛皮を南方に送りつける拠点であり続けたが、キプチャク・ハン国成立後は、その首都となったサライがやはり抬頭を見せた。貢納品として、あるいは取引商品として北方からサライに送られた黒テンや白テン、リスやキツネ、それにクマ、ヤマネコなどの毛皮・皮革は、そこに開設された毛皮市場で続々と<sup>い</sup>集集して来た諸国の商人へと売り渡された。毛皮類のほとんどはモンゴル帝国内のイスラム世界へと流れたが、特に黒海周辺の交易所ではイタリア商人の手を通じて西欧世界にまでサライ経由の毛皮を届けることがあったとも言われる。1260年代には、東方貿易によって共和都市として繁栄の軌道に乗りはじめたイタリアのジェノヴァが、クリミア半島のカフファでの交易特許をキプチャク・ハン国の支配層によって公認され、1290年までには莫大な量の白テンやリス皮が西方世界に向けて送られるに至った。フィレンツェの商社バルディの商社員で『世界商用旅行案内記』（1340年頃公刊）を著して名をのこしたフランシスコ・ペゴロッティは、ドン河河口のターナの町では「キツネ、黒テン、ニオイネコ、白テン、シカ皮は単品で売買され、リス皮や白テンの生皮は1000枚単位で取引された」と書き記している<sup>82</sup>。

(42) Noonan, op. cit., 333. ペゴロッティの人物像およびその旅行書の概略については、山中謙二（前掲書）38。さらに詳しくは H. Yule & H. Cordier, *Cathay and the Way Thither*. (London, 1913) vol. 3. が参考となる。



先に本稿（前号57頁）で見たハンザ同盟の500枚、1000枚単位の取引方法は、案外、モンゴルやイスラム世界の取引方法がノヴゴロドあたりを通じて波及したものであったかも知れない。

1350年代の内紛とティムール〔1336年～1405年〕の侵略による混乱でキプチャク・ハン国の権力機構は大きく揺らぎ、ロシアに対するモンゴル支配は弱まった。そうした政治不安は、毛皮取引の趨勢にも大きく影響を及ぼし、サライの衰退がはじまった。しかし、ロシア、シベリア、そして「暗黒界」地方からの南方（そして西方）への毛皮輸出は、もはや止まることを知らぬ勢いを持つものとなっていた。直ちに新たな取引拠点が勃興し、サライに代わってヴォルガ下流のアストラハン、ブルガールに代わってカザンが起こった。そして何よりも、次項で論及するモスクワが、毛皮の「ユーラシア交易圏」のネットワークを、いわば総仕上げする形で抬頭した。モスクワを支配したロマノフ王朝は、モンゴルの創案した<sup>ジャムチ</sup>駅伝制度を継承して、広大なシベリアの征服・統轄を実現した。

なお、『元朝秘史』には、随所でホラズムなどにおけるムスリム商人の活動が詳述されているが、サルタク<sup>びと</sup>人〔トルコ系・イラン系ムスリム商人〕の活動についてふれた次の如き一文からだけでも、モンゴル帝国、イスラム商人と毛皮取引との係わりを推し量ることができるだろう。「……かくして、チンギス・ハンは立ち去って、バルジュナ湖に下営した。ハンは……〔トルコ系の〕オングト族の王者のところから、アサンというサルタク人が白いラクダに乗り、1000頭の羊を追ってエルグネ河の下流でテンや青ネズミなどを買い求めにやって来て、そしてバルジュナ湖へ水を飲みに入ってくるのに出会った。」

上の一文についてコメントした護雅夫氏によると、すでにモンゴル帝国形成のはるか以前から多数のムスリム商人が中央アジア各地に進出しており、モンゴル時代には「<sup>あつだつ</sup>斡脱」と呼ばれた特権商人集団が資本貸付や高利貸しを通じてそれらムスリム層を支配する形で大がかりで広範な商業経営に関与していたという。<sup>13</sup>

(13) 1981年9月18日～21日までの3日間にわたり中近東文化センターで開催されたシ

ンポジウム〈東西交渉史におけるムスリム商業〉において、護氏は「モンゴル・ティムール帝国——内陸貿易」と題した発表を行なわれた。筆者もこのシンポジウムに参加する機会を持ったが、「幹脱商人」についてはその折配布された護氏のレジメを参考にした。なお、1981年になってこのシンポジウムの各発表を要約した討議録が同センターより発行され、シンポジウム参加者に送付された。

### 3 モスクワ商人とヨーロッパ市場

アストラハンやカザンの興隆は、蒙古帝国北西部におけるモンゴル支配の崩壊を象徴するものであったが、その地域におけるモンゴル衰滅に決定的な影響を与えたのはスラヴ諸族の自立、とりわけ15世紀の内にノヴゴロドやキプチャク・ハン国、さらにはアストラハンやカザンを<sup>し</sup>凌いでやがては17世紀にシベリア全域をも支配するに至ったモスクワ公国の抬頭であった。その前史についてはすでに前章の2「ロシア商人の起源」の項目などでふれたが、時代の流れを読みやすくするため、モスクワ公国を中心に再び9世紀頃からのロシアの毛皮史をふり返しておく必要がある。

9世紀から10世紀にかけて、主にドニエプル河中流域に活動の拠点を持ったロシア人たちは、黒海を通じてビザンチン帝国との間にかなり盛んな取引活動を演じていた。9世紀半ばには、多数の「ロシア人」（東欧・北欧人を含む）のバックダードでの活動が記録された。黒海地域への主な輸出品は毛皮をはじめとして蜜蠟<sup>ろう</sup>、ハチミツ、そして奴隷であった。キエフに本拠を置いたロシア人支配層は、東方諸族に毛皮貢納を課し、定期に莫大な数量の毛皮を獲得した。キエフとノヴゴロドとを統一して「賢公」と讃えられたオレグ大公〔879年～912年〕は、883年、近隣のテレヴリアニア人一人ひとりに、上質の黒テンの毛皮を貢納する義務を負わせた。テンはリス皮と共に貢納の主要部を占める最重要物産で、ロシア支配層によって徴収された大量の毛皮は、ドニエプル河を下る商船に積み込まれて黒海やコンスタンチノーブルをめざした。1050年頃から2世紀の間、1240年まではロシアからの南方向け毛皮輸出は拡大の一途をたどった。

しかし、ヨーロッパに向けて西向きの交易ルートが<sup>ひろ</sup>拓けて来ると、従来一定

の領域に限られて展開していた「ルーシ商業路」は大きく変貌することになった。その転換は、モンゴル勢力の消長に連動したユーラシア・ステップ一帯の政治不安や中央アジア、ビザンチンの政治・経済情勢を直接に反映したばかりでなく、むしろ、北方からのヨーロッパ向けルートが確立してノヴゴロドやロシア北部諸地域からの毛皮輸出が激増した事情を反映していた。すなわちバルト海経由の商業ルートの成立である。イタリアやドイツ、フランス各地に都市が出現しはじめる11～12世紀ともなると、黒海、ビザンチン経由の毛皮取引は運送費がかさむだけの不経済な活動になり下がった。キエフからコンスタンチノーブルに向けて毛皮を運び、そこからイタリア諸都市やドイツのレーゲンスブルクにまでそれを再輸出するよりも、バルト海経由でダイレクトにヨーロッパに運ぶ方がよほど利益は大きかった。無論、同じキリスト教圏への輸出とはいえ、当初は冒険的な取引の範疇を抜け出るものではなく、ロシアから直接西欧へ向かう商品の流れはそれほど多くはなかったが、カザンの経済力に依存しながら着々と発展の基礎を築いていたモスクワ公国がノヴゴロドに匹敵する力を持ちはじめると、事態は決定的に改まるに至った。ノヴゴロドの側から見れば、カザンの繁栄にいわば「寄生する」形で抬頭したモスクワが、自分たちの利益を蚕食しながらいつの間にか覇権を拡張した、ということになる。實際上、モスクワはイヴァン3世がキプチャク・ハン国からの独立を達成する1480年代までに、ヨーロッパ・ロシアの極北部の大半を制した。イヴァン3世はビザンツ皇女ソフィアを娶り、モスクワは「ギリシャ正教の避難場」となって「第三のローマ」と呼ばれるほどになった。

元もとモスクワ公国はスラヴの国でありながら、モンゴルの支配層から貢納取り立ての役目を一任され、他のスラヴ諸国から厳しい取り立てを行うことで支配層の一部に紛れ込んでいった。モンゴルは、「タタールのくびき」と形容される言葉があることからうかがえるように、14種以上もの厳しい貢税をスラヴの同朋に課して、収奪をほしいままにしていた。モンゴルの脅威が有無を言わさぬ冷酷さを含んでいたこともあるが、モスクワ公国は、いわば、そのモンゴルによる冷酷な収奪の「おこぼれ」にあずかって発展の基礎を築いた訳である。

モンゴル支配下のモスクワ公国のように、「長いものに巻かれた」うえで同朋や下層の者をしぼり上げ、それによって特権層にのし上がる輩<sup>やから</sup>は、今の時代に至るまで絶えたことがない。

16世紀になって書かれた『イフラシーニア年代記』にはルーシ諸都市がモンゴルに征服されてゆく有様が記録されているが、それによれば、モンゴルの権力者にとり入った徴税人の取り立ては冷徹をきわめ、「金のない者からは子供を取ろう／子供のない者からは妻を取ろう／妻のない者からは首を取ろう」などという歌が唄われていたという。後にマルクスが指摘したように、まさに「モスクワはタタールのくびきによって抬頭し、タタールの奴隷制によってこそ今のロシアの栄光は確立した」と言える訳である。20世紀の今日、ウクライナ人たちは「ロシア人はモンゴルとの混血だから嫌いだ」と悪口を述べているというエピソードがあるが、これは、ヤサク取り立てに係わる歴史的な<sup>おん</sup>怨念が如何に根深いものかを物語っている<sup>(1)</sup>。なお、モンゴルの税は、通常は銀のインゴットで納められたという史実が幾人かの研究者によりすでに指摘されているが、農民からは毛皮と小麦とを納めさせ、それを銀にかえて支配層に献納するというのが一般的な納税法であった。「世界の人民の半数を支配した」と言われる空前のモンゴルの征服事業の根底には、隷属を強いる冷酷な支配のシステムと、そして毛皮とが横たわっていたとみるべきである。

ともあれ、以上の推移に絡んで、ここでノヴゴロドとモスクワとの間に絶えず争いがあった史実を思い起こしておきたい。その概略については、前章すでにふれた。この両者の反目の過程で、特に1390年代までは、散発的な小競り合いが何度も生起した。モスクワ側は折にふれてドヴィナ河一帯の領有権を主張し、それに対してノヴゴロド軍がくり返しモスクワ大公領ウスティウグなどに攻め入った。1425年、ノヴゴロドがドヴィナ河地域でのモスクワ人の反乱を理由にウスティウグの町に50匹のリス皮と640枚のテンの毛皮の支払を賠償として課したことは、その後幾年にもわたって両勢力の間に断続的な血みどろの紛争をくり返させる遠因のひとつになった。現ラトヴィア共和国のリガに通じ

(1) 1992年6月20日放映のNHKスペシャル『大モンゴル：世界征服への道』による。

るドヴィナ河（西ドヴィナ河）を制した者こそが、バルト海への飛躍を約束される筈であった。1445年には、ドヴィナ河およびオネガ湖周辺で、総計3万人のノヴゴロド人が虐殺されるに至ったとさえいわれる。<sup>(2)</sup>

ノヴゴロドとモスクワの激しい角逐の狭間にあって、カザンの町も昔日の面影を徐々に喪<sup>うしな</sup>っていったが、ロシア産毛皮の南方向け輸出は色いろなルートを通じて命脈を保ったため、カザンでの毛皮取引が完全に衰退してしまうようなことはなかった。例えば西ロシアのルヴォヴの商人たちは14世紀にはカッファ、タナ、サライなどへの毛皮輸出を盛んに行なったし、15世紀にはモルダヴィア、トランシルヴァニア、そして黒海一円との取引がみられてカザンも間接的ながらその恩恵を蒙った。モルダヴィアと西シベリアを結ぶルートは、オスマン・トルコが黒海支配を達成してからは、イスタンブール（コンスタンチノーブル）にまでつながるものとなっていた。サマルカンドでティムールに仕えたカスティリヤの騎士ルイ・ゴンサレス・クラヴィホが目撃したところでは、1405年頃に至っても、「ロシアおよびタタール各地からの毛皮は、カザンの地にあふれるほどであった」という。それより少しのち、ヴェネチア共和国の大使としてウズン・ハサン統治下のタブリーズに駐在したジョサファ・バルバロ〔?～1494年〕は、1437年頃にはカザンへの毛皮の供給源は主にモルダヴィアとヴォルガ中流域とであったと述べている。

ともあれ15世紀には、モスクワはカザン並びにノヴゴロドの追い落としに成功し、ロシア中・北部における毛皮取引の実権をほぼ完全に掌握した。1476年には、モスクワで毛皮を買いつけるために多数の「タタール商人」がカスピ海沿岸のダーベントからアストラハンへと出帆していた模様が、アンブロジオ・コンタリーニによって書き留められた。1356年以来、スダク（スロズー）の商人が大挙してモスクワに進出していたため、モスクワの南方向け毛皮は、スダクをはじめとしたクリミア半島諸都市に向けても大量に輸出されていた。コンタリーニがこの時期にカッファへの途次、幾つもの隊商<sup>キャラヴァン</sup>の列がドニエプル経

(2) R. Delort, *L'Histoire de la Fourrure de l'antiquité à nos jours*. (EDITA S. A., 1986) 138.

由で北部ロシアから南部ロシアへ通じる商業路に沿って毛皮を運んでいる姿を記録した時、彼は遠くモスクワへとつながる商業路の形成とその変貌を目撃していたのである。言い換えれば、アルメニア商人やユダヤ商人、それにルヴォヴの如き町に<sup>い</sup>蝟集した雑多な国籍の商人たちが北方からの毛皮を運ぶ姿を書き記したことによって、コンタリーニはモスクワ公国という新興の取引拠点<sup>(3)</sup>が着々と地歩を固めつつある姿を記録した訳である。

実際、モスクワが毛皮取引の歴史の中で一層重要な意義を<sup>にな</sup>担い出すのは、15世紀中葉以後、すなわちコンタリーニの時代以降に、この公国が南方以上に西方市場との結びつきを強めるに至ったからである。すでに1430年代、モスクワからポーランド、プロシア、さらにはフランドースに向けて毛皮が輸出されていた史実をバルバロが書き留めていたが、コンタリーニによると、1476年から翌77年にまたがる冬の間、極北の地で獲得されてモスクワに売られた大量のキツネ類やビーヴァー、白テン、リス、その他ありとあらゆる種類の毛皮を買いつけるために、ドイツ商人やポーランド商人が続々とモスクワに押し寄せたという。その結果、モスクワでは、従来より北方産毛皮の取引を支配していた近東系商人とヨーロッパ商人とが対立する事態となった。その対立は、やがてヨーロッパ商人の優位として定着し、そしてその優位は、以後決して揺らぐことがなくなった。永く後進地域ないしは被支配地域として<sup>ひっそく</sup>逼塞していたヨーロッパ世界が、中世の「暗黒」から脱皮して新しい時代を迎えるに至ったきっかけは、毛皮交易史の趨勢とも大きく係わっていたのである。少なくとも、東ヨーロッパ世界に関しては、その趨勢は決定的な比重を持っていたと断言して良く、モスクワが毛皮交易の主導権を掌握した時期は、東欧や北欧において乱獲のために毛皮獣が激減し枯渇した時期であった。西ヨーロッパでも無数とさえ思わ

(3) Noonan, op. cit., 329, 333-334. W. Thomas, et al., trans. and eds., *Travels of Venetians in Persia*. (Hakluyt Society, 1873). C. R. Markham, trans. and ed., *Narrative of the Embassy of Ruy Gonzalez de Clavijo to the Court of Timour at Samarcand, A. D. 1403-1406*. (Hakluyt Society, 1859). E. Nadel-Gulobic, "Armenians and Jews in Medieval Lvov; Their Role in Oriental Trade, 1400-1600," (*Cahiers du monde russe et soviétique*, 12, 1971).

れたヨーロッパ・ビーヴァーなどは狩り尽くされる瀬戸際にあった。それ故、ロシア産毛皮は、16世紀以後には新大陸アメリカの豊富な毛皮と共にヨーロッパ世界で垂涎<sup>すいぜん</sup>的となり、遠くシベリア奥地の毛皮資源を求める開拓運動がはじまった。新大陸との交通が安定的な供給を満たさない限り、モスクワは西ヨーロッパとの毛皮の取引において、いつでも王座を占める機会<sup>(4)</sup>を持った。

ただし、本稿では、16世紀以後のロシア（モスクワ）商人の活動については、今しばらく論及を控える。何故なら、同世紀半ば以後に本格化するシベリアの毛皮資源の開発は、次章に述べる新大陸アメリカでの毛皮取引の進展と共に、「毛皮の世界フロンティア」という概念の枠組みの中で論じた方が一層適切と思われるからである。ロシアが最終的な覇権を掌握するに至った「ユーラシアの毛皮交易圏」は、西欧市場を中枢に大西洋を越えたアメリカの毛皮交易圏と対抗した連動することによって、「毛皮の世界フロンティア」の構成要素へと変貌してゆくことになる。

- (4) E. E. Rich "Russia and the Colonial Fur Trade," (*Economic History Review*, vol. VII, no. 3, 1955) 307-328.